

「職業能力を高めるために 異なる領域の学習のススメ」

リガテック特許商標事務所 北岡 敬三

1. はじめに

皆さんご承知のとおり、今の日本をみますと、高齢化社会がすすみ、高齢社会にすでに到達している地域が出現しています。また、若者の就職意欲や学習意欲の減退により、若者が積極的に就職して自分の家族を持つことが少なくなってきました。

私たちは、高齢になって仕事ができなくなると、これまでは自分の子どもに未来を託して余生を送ることができましたが、これからは子どもの有無にかかわらず私たちは高齢になっても働かなくてはなりません。

これまでの考え方では、学校を卒業してある種の職業につけばほぼ定年までは収入が確保できました。しかし、これからは個人の職業能力が収入を生むのであって、会社のような組織が収入を確保してくれる時代は終わりました。

2. 異なる領域の学習の例

私は、最初の大学に入る時点で、図1に示すように、複数の異なる領域の学習をしたいと思っていました。このように思ったのは、アメリカの友人がこのような考え方を持っていて、盛んに私に対して話してくれたからです。このアメリカ人はその当時現役の大学生でしたが、経済学を修めた後に工学を学習していました。

そこで、皆さんにとって参考になるかどうかは不明ですが、私の学習歴を例示してみます。

私が第1番目の大学の学生のころ、すなわち30年くらい前には1つの領域の学習がすむと社会に出ていって就職してそれなりに活躍できました。私は大

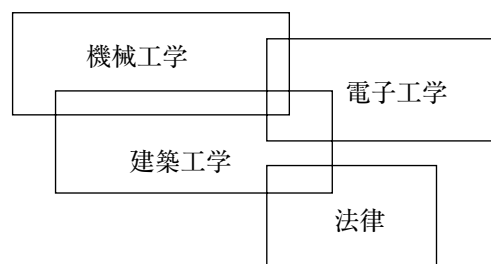


図1

学生時代とても貧乏で、アルバイトをしないと学費も生活費も全く出せないで、第1番目の大学生時代には常に将来のことや生活に危機感がありました。

私は第1番目の大学では機械系の学習をしていましたが、その一方で時代の流れを感じて電子系の学習がとてもしたくて、いずれは同じ第1番目の大学の電子工学科へ再入学したいと思っていました。第1番目の大学では、機械、電子、建築、数学などの各先生と出会っています。

しかし、現実問題として経済状態がそれを許さないで、私はいったん就職をして結婚もし、第2番目の大学に入学できるチャンスを待っていました。27歳頃には、経済的にある程度大丈夫になって、私は第2番目のある大学の電子工学科に入学しました。

この第2番目の大学は夜間大学ですが、電子工学の各先生に出会うことができ、ほぼ考えていた学習ができました。この時点で私の学習計画は終わりにしようと思っていました。

ところが、ある日建築に関連したことにかかわったために、建築工学に興味急速に移ってしまいました。この建築工学への興味は、電子工学への興味を失わせるほど大きいものでした。そこで、私は第3番目の専門学校に30歳になる前に入学しました。

その専門学校では、大変経験の豊かな建築実務の専門家に巡りあうことができました。

この時点でさらに、工学系ではなく法律に興味がありました。懲りもせずに、私は第4番目の大学の法学部に入学しました。しかし、あまりに教材が古く講義も理解しにくいものであったために、1年半くらいで中退し、法律系の予備校で少し学習しました。

現在私は、工学にも法律にもさほど興味がなくなりましたが、医学や、陶器や絵画などの芸術に興味が出てきました。

このように興味が変わった時点で異なる領域の学習をしましたが、その結果、私は次のようなメリットが得られたと考えています。

3. 異なる領域の学習のメリット

① 異なる領域の学習の第1のメリットは、図2に示すように、結果として生涯教育を自分で積極的に行っていることになり、将来への漠然とした不安をうち消すことができる原動力になり得ます。

② 異なる領域の学習の最も大事な第2のメリットは、複数の領域を学習することで、単純な足し算の能力の蓄積ではなく、図2の破線で示すような思ってもみない周辺領域の能力の蓄積が生じます。

私の場合には、電子工学と機械工学を重ねて学習した結果、 $1 + 1 = 2$ の能力の蓄積ではなく、 $1 + 1 = 3$ の能力の蓄積になりました。電子工学と機械工学と建築工学を重ねて学習した結果、 $1 + 1 + 1 = 3$ の能力の蓄積ではなく、 $1 + 1 + 1 = 5$ の能力の蓄積になりました。つまり、関連する周辺情報領域が大きくなり、活躍できる領域が広がった気がします。

例えば、別の例では、医学と法律学の両方を学習することで、医療事故に関する希少な専門家になれる可能性があります。医学と電子工学の両方を学習することで、医用工学の専門家になれる可能性があります。芸術学と医学の両方を学習することで、新しい患者さん本位の病院形態が構築できるかもしれません。建築学と福祉学を学べば、いわゆる高齢化社会に対応できる建築物を設計できるかもしれません。経済学と心理学の両方を学習することで、新しいマーケティング方法ができるかもしれません。国際政治学と中国語と米語を同時に学習すること

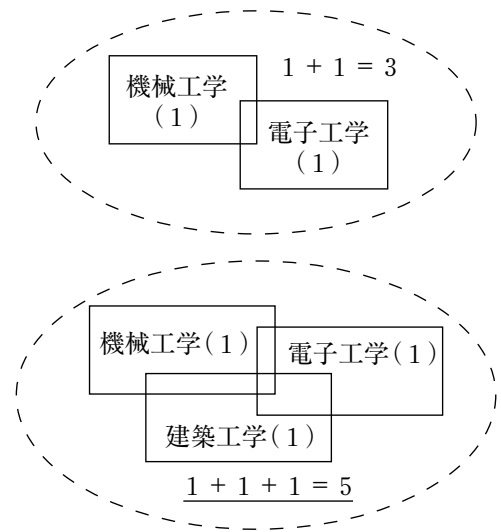


図2

で、有能な国際政治の通訳者になれるかもしれません。

③ 異なる領域の学習の第3のメリットとしては、複合した学習により、他の人にはない新しい発想が生まれて、何度か生じるであろう世の中の大きな変化に追従することが可能になります。

④ 異なる領域の学習の第4のメリットは、幅広い人脈が得られることです。これはかなり将来にわたって財産になります。

いずれにしても、通常他人が考えることをさけて自分の特殊性を創造できれば、他人に追従を許さない有効な職業能力を有するある種の専門家になることができるでしょう。

4. 自己への投資

異なる領域の学習をするためには、かなりの時間と費用がかかります。この費用は、仕事をしながら確保することが、自己の危機感を常に保つ意味からも大切です。

異なる領域の学習をするには、①時間的に少しずつ空けて実行していく方法と、②集中的に同時期に実行していく方法があります。私の場合は両方の方法を用いました。

また、学習するための施設としては、国内と海外があり、受講形態としては、直接大学、専門学校などの学校へ通うのと、通信教育があります。いずれを組み合わせても効果が得られるでしょう。

私は、学習途中で気になるポイントについてそれ

ぞれファイルをつくって保存することで、いつでもそのポイントが利用できるようにしています。

例えば、医用電子工学分野におけるX線CT撮像装置というポイントのファイルと、医学分野における抗ガン剤というポイントのファイルを見ることで、抗ガン剤が生体内で拡散する状態を非侵襲で観察できることがわかるようにしています。また、別の例では、電気分野におけるモータというポイントのファイルと、情報分野における記録媒体というファイルを見ることで、DVDなど回転記録媒体の動作機構がわかるようにしています。

5. 異なる学習をより簡単に行う方法

これは簡単なことです。異なる分野の雑誌や新聞を、定期的であっても不定期であってもかまわずに乱読することです。

例えば、写真技術の雑誌とダイビング関連の雑誌を定期的に購読することで、海洋写真家になるための素養ができるかもしれません。

6. 従来の価値の消滅

世の中の各分野が成熟して、容易に職業能力が発揮できない時代になりました。ある期間では特定の分野の優れた専門家だといわれていても、次の瞬間にはその価値が消えてしまうことがあります。

例えば、和文タイプを行う和文タイピストは、和文のワープロが出現するまではきわめて高い専門性がありましたが、和文ワープロが出現してからはあっという間に利用価値がなくなってしまいました。

和文タイピストの場合にはかなり長い間専門性が発揮できましたが、和文ワープロのオペレータはパソコンが普及するにしたがって急速にパソコンの操作に移ってしまいました。

別の例では、針を用いるアナログレコードは、かなり長い間使用されてきましたが、コンパクトディスクやMDやHDなどと呼ばれる回転記録媒体の出現により急速に消滅してしまいました。このような回転記録媒体は、近いうちに次世代の半導体メモリーに代わってしまうでしょう。この半導体メモリーが重視されるのは、回転記録媒体のように回転用の駆動源が不要であり、消費電力の大幅な低減と極端

な小型化が図れるからです。

さらに別の例では、テレビジョン受像機が、CRTを使用した箱形のものから、液晶表示装置やプラズマ表示装置といった薄型のものに急激に移行しつつあります。この技術の移行は、日本の家屋事情とデジタル放送への移行を背景として急速に進みます。

このように急激な変化が生じるこの時代にあっては、変化に対して柔軟に対応できる職業能力が必要です。

7. 加齢と職業能力の変化

職業能力を高めるうえで障害となるのは、加齢と病気です。

加齢について考えますと、加齢が進むとともに、職業能力には大きな変化がでます。年齢をいくつかの区分に分けてみますと、例えば20歳前後から35歳くらいまでの第1区間と、35歳くらいから45歳くらいまでの第2区間と、45歳くらいから60歳くらいまでの第3区間と、60歳以降の第4区間になります。

第1区間では、体力と好奇心が旺盛であり、学習意欲も高いので、今まで述べてきたような学校での学習によって職業能力の開発が比較的可能ですし、好みの仕事を確保するのは容易でしょう。

第2区間では、転換期であり、ある程度の経験と失敗に基づいて、必要に応じて新たな職業能力を進んで身に付ける必要があるかもしれません。

第3区間では、経験は豊富ですが、体力と気力が低下していますので、時代の要請には合わなくなっているでしょう。この時点で早めに新たな職業能力を身に付けなければならないかもしれません。

第4区間では、これまでの職業能力とは違った観点で多くの経験を土台にして体力と気力に合わせてゆっくりと職業能力の転換を図ればよいと思います。

いずれにしても、年齢が高くなるに従って職業能力の選択幅は狭まり収入も極端に減ります。このため、できるだけ若いうちにいろいろな分野に入り込んで知識を身に付けておくと、比較的早い年齢で職業能力を高める手法と要領が身に付くでしょう。もっとも時代の流れが以前に比べてかなり早く、しかも中国や韓国といった外国との競争が激しくなっていますので、そう簡単ではありませんが。